

公益財団法人国際仏教文化協会 発足報告の宴 報告

国際仏教文化協会は「公益財団法人」の認定を受け、その事業が不特定多数の一般に資する財団として新たな出発をすることとなりました。ヨーロッパを中心とするサンガを支援するというこれまでの事業をその核としながらも、さらに、日本に培われた大乘仏教の思想・文化を広く世界に振興し、もって世界平和に寄与することを目指して新たな一歩を踏み出しました。そこで、今後のますますの公益事業の発展を期し、ご支援いただいている有縁の方々に「公益財団法人」認定のご報告とこれまでのご支援に感謝申し上げますとともに、新たな出発を祝する祝賀会が、2014年2月18日に東急ホテルにて催されました。

佐々木恵精理事長の挨拶と「恩徳讃」で法要を終えた後、会は、当協会前評議員であり、国際的な視野のもとで活躍されている釋徹宗先生をお迎えして、「転換期と直面する日本仏教」と題したご講演をいただきました。その後、休憩を挟み、親睦の集いが催されました。

公益法人認定に当たり、その申請書類の作成と内閣府とのやりとり、新しい会計基準に則った会計書類の作成に、長期間にわたって甚大なご尽力をいただいた、石塚実石塚会計事務所所長様よりご祝辞をいただきました。そして、当協会前理事であり、本願寺派勸学寮頭である徳永道雄さまより乾杯のご発声を頂戴し、親睦を深める時間を過ごしました。出席者はお互いに意見を交換し、金児慧評議員より、より一層のご支援を願うご挨拶をさせてい

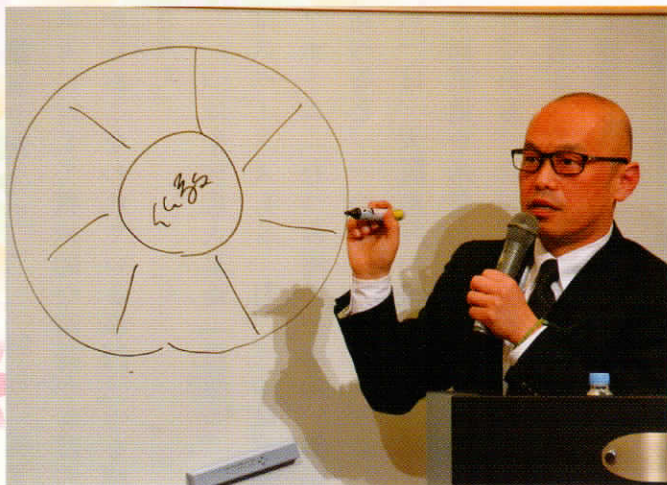
ただき、充実した時間を過ごしました。

次に、釋徹宗先生のご講演の内容を、報告いたします。

釋徹宗「転換期と直面する日本仏教」報告
本多 真記

釈徹宗先生は「転換期と直面する日本仏教」という講題でお話しなされた。

先生ははじめに宗教をめぐる近年の環境変化について言及された。1980年代、NHKで「宗教回帰現象」が放映され右肩上がりの経済に対する布石として宗教回帰現象がみられた。ところが1995年のいわゆる「オウム真理教事件」でカルト宗教の認識が強まり、人々の宗教離れは加速した。その後2000年頃には再度宗教回帰



釈徹宗先生のご講演

の傾向が認められるようになり、それまでの宗教を信仰としてではなく、情報（知識）として学ぶ姿勢が目立つようになった。この傾向は現在も根強いといえるであろう。2010年には、死者葬送の儀礼に関して女性誌や経済誌を中心にバッシングが繰り返されるようになった。不明確な布施収入についての批判などである。その後2011年には東日本大震災が起こった。震災後、伝統仏教教団による被災地での積極的な活動に加え超宗派による救助活動がみられ、伝統仏教に対する人々の見方はコミュニティを支える力とし

て肯定的に受け入れられるようになった。このような分析をとおして先生は、人々が仏教に求めているのはあくまで現実の社会生活に根ざした、すなわち公共的な観念としての仏教であるとの見方を紹介された。

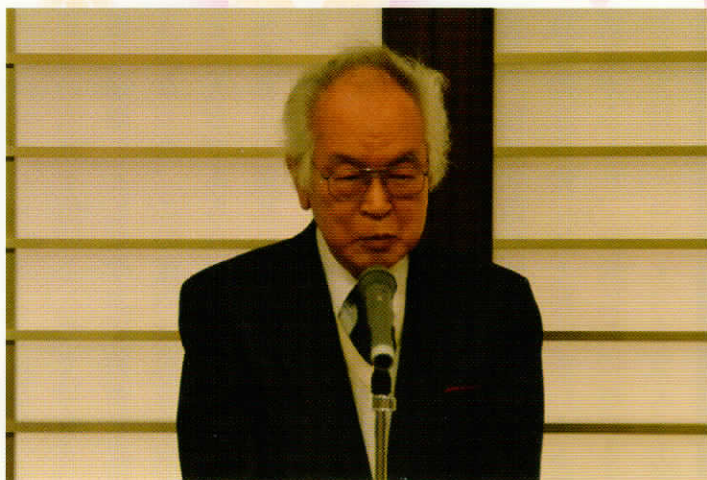
講演では、日本仏教をとりまく状況の多面的な側面についても言及された。全国の寺院では「お寺にお参りする人が減った」などとの声を聞くものの、先生によるとそれが必ずしも「仏教離れ」とは直結しているとはいえないという。つまり、人々が仏教に対して抱くイメージは否定的なものではなく、たとえば、仏教音楽、仏像、伝統芸能など、仏教文化への興味は今日も根強い。一方で人々の関心は、特定の宗派への帰属意識から遠のいている現状があり、そのことが「仏教離れ」と捉えられる一因となっているという。

先生はそうした仏教に対する人々の動向を三つの層に分けて説明された。すなわち、中心に仏教の核心となる「宗教性（悟り）」があり、その周囲を二層目の「宗派」が包み込み、その外側に三層目の「文化」が息づいている。二層目が力を失っているのが現状といえよう。



石塚実会計事務所長よりご祝辞

それでも三層は相互補完的な形状を保ちつつ今日に至っているが、なかでも注目されるのは三層目の文化としての仏教である。人々は仏教を否定的に捉えているというよりも、むしろ親しみを感じている。ただ、僧侶とのアクセスが皆無なことや、お寺の敷居が高いこと、さらには特定宗派への帰属意識を強調することに大きな意味を見出せないでいる。裏返せば、お寺や僧侶に対する期待はこうした意識を転覆させるところに生じてくるものといえよう。



徳永道雄前理事による乾杯のご発声

講演で釈先生は、三層目に属する人々に対して積極的な活動が寺院内外からおこなわれている事例三つを紹介された。

一つは生前個人墓地「自然^{じねん}」、二つはスペースALSD、三つはグループホーム「むつみ庵」である。概略を述べると、一つ目の生前個人墓地「自然」は、大阪市内の浄土宗寺院による合同墓地を基盤としたコミュニティ作りである。合同墓地に入ることを決めた者が生前から集まって亡くなった後を意識したコミュニティ形成がおこな

われる。生前、墓地を予め購入する事例は存在するものの、この寺院では共同墓地購入を通してコミュニティを作り、旅行や法話などを通して親睦を深めることをしている。そして命終えた後は仲間たちが葬儀に参拝し納骨を見届ける。このシステムは、それまでの形式的な檀家制度や墓地管理の制度から逸脱したシステムでありながら、一方で新しいコミュニティ形成に仏教が一翼を担うケースといえよう。

二つ目の「スペースALSD」は、実際に京都で生活するALS患者（甲谷匡賛氏）の事例である。甲谷氏は身体の筋力が著しく低下する病気にかかりながらも、民家を使ったコミュニティの場を形成していった。彼一人で生活することはできないことから、多くの協力者を実家に集めて自分の世話をしてもらい、同時に民家を開放して法話や音楽イベントや芸術公演を開催している。また甲谷氏は宗教にも造詣が深く、ALS患者として寺院で得度をして僧侶にもなった。特定の非宗教空間でスピリチュアル・ケアをおこなうこのようなケースは、肉体的な苦痛を抱えながらも精神的な答えへと理解を開いてゆくもので、パストラルケ



乾杯の様子

アにも通じる。講演では、韓国の国立病院では祈りの空間として仏間やチャペルが併設されていることを紹介された。

三つ目は、釈先生が手掛けるグループホーム「むつみ庵」の事例である。寺院の裏地にある宅地を解放して行政から許可を得て現在に至っている。認



祝賀会会場の様子

知症老人などを受け入れ、現在主流となっているバリアフリーの福祉施設とは正反対の「我が家」に近い施設を指している。勤務者も近隣の方々が多く、「ただいま」と言ってもらえる家である。これは現代社会が抱える「家では死ねない」という大きなテーマに対する一つのアプローチといえよう。

ところで、社会をみてゆくと宗教は

生活のさまざまな局面でその必要性が求められているように思われる。先生
の着眼点は、世俗主義（セキュラリズム）を越境する宗教現象にある。近代
国家の成立は、法整備されたパブリックな領域を作り出した一方で、個々の
内面的な問題をプライベートな領域としてパブリックにさらしてはならない
ものとして押し止めてきた。宗教者による伝道の姿勢もこのコンテキストの
中で、個々の内面への問いかけとしてプライベート領域の拡大に終始してき
た。その結果、パブリックとプライベート



金児評議員から挨拶

ートは二項対立化し、結果、信仰は「心の中に押し止めるもの」と閉じ切ったものとなっていた。ところが、近年宗教をとりまく現状は変化している。こうした二項対立の構図、すなわち世俗主義の克服がさげばれてきているのである。釈先生はそんな宗教をとりまく現状を紹介されたといえる。

むすびとして先生は、私たちがおこなえるいくつかの視点を紹介された。それらは、「僧侶こそお寺へ行こう」「消費者体質の転換」「時間を延ばすシステムを」「さとり世代のフェア&シェア」であった。仏教が持つポテンシャルを、地域コミュニティと都市部の双方に提供できるのではないかという先生のお話に聞き入った一時間であった。

